

第 22 回

第 3 章 国際社会に生きる日本人の自覚

儒教の日本的展開

今回学ぶこと

江戸時代、幕府は朱子学を広めようとしたが、それに対して、朱子学を批判した伊藤仁斎・荻生徂徠などの思想が生まれた。さらには儒教そのものを批判し日本人本来の生き方を説いた国学も登場した。また商人や農民の思想や、幕末における変革の思想など、江戸時代に花開いた多様な思想について学ぶ。



講師
田中久文

今回のキーワード！

朱子学／伊藤仁斎／荻生徂徠／国学／心学／吉田松陰

日本的儒教の成立（伊藤仁斎と荻生徂徠）

江戸時代になると、幕府は儒教、特に朱子学を重んじるようになる。朱子学は宇宙全体にも人間の心にも、1つの「理」というものが貫いていると考えた。そして、人間の心のうちに「理」を磨きだすためには、感情や欲望を抑えなければならないとした。また社会全体に「理」が実現すれば、秩序ある社会になると説いた。

しかし、実際にはこうした朱子学を批判する儒学者たちが続々と登場した。伊藤仁斎は、朱子学が感情や欲望を抑えるべきだとしたことを批判し、儒教の根本精神は、あふれるような愛としての「仁」にあると説いた。

また、荻生徂徠は、宇宙の「理」を説くような朱子学を現実離れたものとして批判し、本来儒教とは豊かで平和な社会を実現するための政治制度・社会制度を説くものだと考えた。

国学の誕生

江戸時代には、朱子学を批判するばかりでなく、さらには儒教全体を批判する国学も登場してくる。国学の大成者である本居宣長は、儒教というものが他国の中国で生まれたものに過ぎないとし、日本人であるならば、日本固有の教えを学ぶべきだと説いた。そして、『源氏物語』や『古事記』など日本の古典を研究した。

宣長によれば、『源氏物語』は「もののあはれ」というものを表現しようとしたのだという。それは朱子学の説くように感情や欲望を抑圧するものではなく、うれしいことでも悲しいことでも、それぞれに感動する心のことであるという。さらに宣長は、晩年『古事記』を研究し、そこに描かれている神々のおおらかな生き方こそ、日本人が理想とすべきものだと説いた。

商人・農民の思想と幕末の思想

江戸時代には、商人や農民の間でも独自の思想が生まれた。

石田梅岩は、商人の生き方を説く心学を創始した。そこでは商人に必要な具体的な心構えとして、「正直」と「儉約」が説かれている。

また安藤昌益は、すべての人間が直接田畑を耕す「自然世^{しぜんせい}」を理想とした。さらに二宮尊徳は、天地の恵みを受けながらも、農民たち自身の努力の必要性を説いた。

幕末になると、社会そのものを変革していかなければならないという思想も起こってくる。吉田松陰は、幕府を倒して身分による差別や藩ごとの区別を撤廃し、天皇のもとに国民全体が一体となれるような新たな社会を構想した。

Tanakaコラム

心の成長の源「あはれ」

本居宣長によれば、「あはれ」というものは喜怒哀楽すべての経験から起こる感情だが、そのなかでも「悲しみ」の感情が最も深いものだということです。しかも、「悲しみ」の感情によってこそ、人間は世界の本質に触れることができるというのです。たしかに、私たちは楽しいことやうれしいことよりも、悲しいことによって成長することの方が多いのではないのでしょうか。